

古高ドイツ語におけるラテン語 ,virtus' の訳語をめぐって

丑 田 弘 忍

virtus「徳、力」なる語はヨーロッパの精神史においてきわめて重要な概念と言える。古代ギリシア人はこれを *ἀρετή* なる語でももって表わした。virtus は vir + 抽象名詞構成要素 -tus に分析され得る。vir は「男」、元来は「力強い者」の意味であり、virtus は全体で「男らしさ、有能さ、勇気」などを意味し、senatus virtutem constantiamque collaudat「元老院の勇気と不退転の決意を賞讃し…」(caes. civ. 1. 6. 1) のように用いられたり、それよりさらに、neque adhuc virtus in flondibus ulla est「葉にはまだいかなる力もたくわえられていない」(Ov. Met. 15, 205) のように事物に具わる卓越性なる「力、価値」などの意味へと押し広げられて行き、最後に倫理的な「徳」の意味を有するに至った。最初から virtus にこの「徳」の意味があったわけではない。この倫理的な「徳」の意味はギリシア文化の影響の下に *ἀρετή* の意味を借用して成立したと言われている。⁽¹⁾ このギリシア語の *ἀρετή* にしても、元々は卓越性を意味していて、後に「徳」の意味へと発達していった。

中世に入ると virtus はキリスト教の強い影響の下に、*δύναμις*「力、能力」の訳語として神の特質や神から与えられた力の意味として大いに用いられるようになった。

古代ゲルマン・ドイツ人の間にあっては virtus に相当する語は存在していなかった。古典古代の文化やキリスト教の文化がゲルマン・ドイツの世界へもたらされた時、この語を相応しいドイツ語に翻訳する必要が生ずるに至った。特にそれは古高ドイツ語の時代に盛んであった。従って本

(1) Richard Heinze; Vom Geist des Römertums 1972⁴ S. 80

ノートの目的は古高ドイツの諸作品、特にその翻訳作品、「イーゾドル、I.」「ベネディクトゥスの会則、B.」「タチアン、T.」「オトフリート、O.」「ノートカー、N.」において、ラテン語の *virtus* がどのようなドイツ語に翻訳されているかを見て行こうとするものである。実際、諸作品において、古高ドイツ語の次のような語に訳されているか、あるいは相応している。megin, chraft, maht, (gi) walt, ellen, gerihte, guoti, guottat, here, herti, chreftig, chust, starh, sterchen, triuua, tuced, tucedig, tucedigo, tugen, uuoltat, zeichenuuurcho, chusting, (gi) dwing などである。以下年代順に検討してみよう。

(1) 「イーゾドル」における *virtus*

「イーゾドル」⁽²⁾ (フランケン方言、九世紀頃) とは、セビーリャの聖イシドルス (560 頃—636) の神学的著作 *De Fide catholica contra Iudaeos* 「ユダヤ人に対するカトリックの信仰について」の古高ドイツ語による翻訳である。ここにおいて、*virtus* の訳語として *megin* が 3 例あらわれる。

Uerbo \langle , inquit \rangle domini celi firmati sunt et spiritu oris eius omnis uirtus eorum \langle .

Druhtines uuordu sindun himila chifestinode endi sines mundes gheistu standit al iro megin \langle (279)

「もろもろの天は主のみことばによって造られ、天の万軍は主の口の息によって作られた」

この個所は詩篇 32, 6 から直接引用されており、この *virtus* (万軍) は太陽、月、星などと考えられている。⁽³⁾ ちなみに *septuaginta* (七十人訳聖書) では *δύναμις* と訳されている。またこの個所は後にノートカーによって *chraft* でもって訳された (Np. 108, 3)。

(2) 使用したテキストは H. Eggers (Hrsg); *Der althochdeutsche Isidor* (ATB 63) 1964 である。

(3) 例えば Mitchell Dahood: *Psalms I* P. 201

et parilitate uirtutis coopeoationem potentiae et unitatem
substantiae,

Endi auh mit dhes meghines chilihniissu chraft dhes eba-
nuuerches endi einnissa dhera almahtigun spuodi,

(344)

「そして価値の同一性によって効果の相乗作用と実体の一致
を, ……」

この virtus は前後関係から古典ラテン語的な用法の「価値」の意味に相
当すると思われる。

Et cum ille non reuocaretur ad uiam uirtutis

Endi so ir auur dhuo ni uuas huuerfandi zi dhes çrrin
meghines ueeghe (501)

「そして彼(人間)が徳の道へ引き戻されなかった時」

この virtus も前後関係から古典ラテン語的な用法の「徳」に相当すると思
われる。

以上 I. における virtus の訳語は3例ともすべて meghin (megin) と
なっている。この meghin はいかなる語であり、本来いかなる意味を有し
ていたのであろうか。この語は古高ドイツ語の「タチアン」や「オトフリー
ト」にあらわれるが、もはや「ノートカー」にあらわれない、古高ドイツ
語の末期にまで伝えられなかった生命の短い語であった。しかし古ゲルマ
ン方言には広く行き渡っていた古い語であり、古代英語 mægen, 古代サク
セン語 megin, 古代ノルド語 megin (megen) にあらわれ、maht とアプラ
ウト との関係にあると思われ、印欧語幹 *mahg- 「出来る、能力がある」
にさかのぼり得る。古代英語の mægen (mægu, mægyn) は手許の C. W.
M. Grein の Sprachschatz der angelsächsischen Dichter, 1974 によれば
① vis, virtus, robur, potentia, potestas ② vis, copia, multitudo,
exercitus などのラテン語に対応し、「ベオウルフ」においては「力」、特に
「武人の力、威力」などを意味し、また宗教作品においては、「神、キリス

トの力、奇跡」などを意味している。なお「エッタ」の megin は、人間の力、及び超自然的な力をあらわしている。Theodor Frings はこのゲルマン的な megin を die magische Potenz des germanischen Heidentums 「ゲルマン的異教の魔術的力」⁽⁴⁾ と呼んでいる。

I. においても meghin は virtus の訳語としてのみ使われているのではなく、fortitudo 「強さ」、maiestas 「有力、卓越」の訳語としても使われている。それぞれ一例づつを挙げてみよう。

Et requiescit super eum spiritus domini, spiritus sapientiae
et intellectus, spiritus consilii et fortitudinis,
Endi chirestit oba imn gheist druhtines,
gheist uuiisduomes endi firstandendi chidhanc, gheist chirades endi meghines (667)

「その上に主の霊がやどる。知恵と分別の霊、賢慮と強さの霊」

この個所はイザヤ書 11, 2 によっている。キリスト教ラテン語における fortitudo の意味は「逆境に立ち向かい、誘惑に打ち勝ち、殉教を恐れず、信仰を守る」⁽⁵⁾ 精神的な強靱性を表わしている。この I. の個所もそのような意味を有していよう。従ってこのような意味は virtus の意味の一部にふさわしい。この fortitudo も I. にとって virtus と同様な意味として感じとられ meghin と訳されたであろう。

Nec tres deoes, sed in tribus personis unum nomen in-
diuiduae maiestatis
Nalles sie dhrie goda, oh ist in dhesem dhrim heidem ein
namo dhes unchidelliden meghines (262)

「三つの神ではなく、三つの位格において、分ちがたい力の名がある」

(4) Theodor Frings: Grundlegung einer Geschichte der deutschen Sprache. 1957. S. 69

(5) A. Blaise: Le vocabulaire latin des principaux thèmes liturgiques P. 616

キリスト教ラテン語では *maiestas* は三位一体の三つの位格における力の同等性を意味している。⁽⁶⁾ これは *meghin* と訳された。

I. には「力, 強さ」を意味する語は以上の外に *potentia* 「能力, 権力」の訳語の *chraft* と *potostas* 「権力, 支配」の訳語 *chiwaldi* が存在するが, 上の語とどのように異なっているであろうか。

chraft は I. には 1 例だけで, 先にあげた第 2 例の *potentia* の訳としてあらわれる。そこでは「効果」と訳しておいた。古典ラテン語では *potentia* の主な意味はその影響を後に残す力である。キリスト教ラテン語においてもそのように *potentia* は動的・効果的な力を意味している。これは I. では *chraft* と訳された。*chraft* も現代ドイツ語において感じられる如く十二分に動的・効果的なニュアンスが秘められていることが推測される。

I. には *potestas* の訳語として *chiwaldi* が 2 例あらわれる。その 1 例を挙げよう。

Qui per ambitionem regni inrepsrat potestatem
Dher in ghirin dhes riihhes dhurahsnuoh dhes chiuualdi.

(585)

「彼は王国を望んで権力を手に入れた」

古典ラテン語では *potestas* は主に公的・政治的権力を意味している。キリスト教ラテン語においては、「神の力」のように霊的な力としての意味を有するが, また公的権力としての古典にあらわれた意味においても使われている。I. における *potestas* はこのように公的・政治的な世俗的権力の意味であって, これは *chiwaldi* でもって訳された。ここに *chwaldi* は世俗的な権力の意味として以後その道を辿り, 今日のドイツ語 *Gewalt* に至っている。

I. における「力」の意味としての *virtus*, *fortitudo*, *maiestas*, *pot-*

(6) Blaise: op. cit. P. 70

entia, potestas 及びその訳語の間のニュアンスの違いは、かならずしも明確とはいえないが、meghin はその意味を「力」から「徳、価値」へと広く広げている。

(2) 「ベネディクトゥスの会則」における *virtus*

「ベネディクトゥスの会則」⁽⁷⁾ (アレマン方言, 9世紀) とは、西洋における修道会の創立者ヌルシアのベネディクトゥス (Benedictus Nursiensis, 480頃～550頃) が著わした *Benedicti Regula* の古高ドイツ語訳を言う。この B. において、*virtus* の訳語として *chraft* が3例あらわれる。

....., sed amore christi et consuetudine ipsa bona et dilectatione virtutum, quae dominus iam in operarium suum muudum a vitiis et peccatis spiritu sancto dignabitur demonstrare

....., uzzan minu enti uuonaheite dei selbun cuatiu ...
... dera lustida hcreftio, dei truhtin giu in uueracman sinan hreinan fona achustim suntom atume uuihemu keuerdonter ist keaucken (51)⁽⁸⁾

「……キリストへの愛によって、良き習慣によって、徳をめることによって、かかる状態を主は悪徳と罪過から今や清められたる己が下僕の中に聖霊を通して顕現されるであろう」

ここの *virtus* はいわゆる「徳」の意味で使われていよう。しかし古典的な最高善を目的とした徳ではなく、聖霊 (*spiritus sanctus*) によって賜われ、その結果として悪徳 (*vitium* = *achust*) 及び罪 (*peccatus* = *sunta*) と対立したるものである。これは *chraft* と訳された。

Licet omni tempore vita monachi quadraginsimae debet observationem habere, tamen quia paucorum est ista

(7) 使用したテキストは U. Daab (Hrsg.): Die Altdeutsche Benediktinerregel des Cod. Sang 916 (ATB50) 1959 である。

(8) (144) も同様の意味

virtus, ideo suademus istis diebus quadraginsimae omni
puritate vitam suam custodire,
doh eocouelihcheru citi lib des muniches scal pihal-
tida haben, duuidaro danta foero deisu chraft, pidiu
spanames desem tagum (112)

「修道士の生活はたえず四句節を遵守しなければならないとはい
え、しかし数日はそれが特に強調されるので、その日々には
特に清浄な生活を守るよう我々は勧める」

ここの *virtus* は前後関係から、「力、強さ」の原初的な意味を有してい
ると思われる。これは *chraft* で訳されたが、人間のみならず事物の強度を
表わすこの *chraft* は I. においてなら *meghin* であらわされるであろう。
B. には「力」を表わす語として *potestas* が 5 回あらわれるが、先にも述べ
たように *potestas* は公的な力が原義であったが、B. にあっても同じく、
potestas abbatis 「修道院長の権限」などのように公的な力を表わしてい
る。これは I. 同様に *keuualtida* と訳されている (120)。I. におけるように
fortitudo, *potenfia*, *maiestas* などは B. にあらわれない。B. における
virtus の訳語はただ *chraft* だけで、「徳」と「力」の意味を有している。

(3) 「タチアン」における *virtus*

「タチアン」⁽⁹⁾ (東フランケン方言, 9 世紀中頃) とは、シリア人タチア
ヌス (2 世紀) の訳による共観福音書のラテン語訳をフルダにおいて古高
ドイツ語に訳したものを言う。

T. において *virtus* の訳は I. と同じく *megin* で統一されていて、19 回
あらわれる。これらの *virtus* は福音書のギリシア語原典ではほとんど
δύναμις であるが、*ἰσχύς* 「力」もあらわれる。ところで福音書の *virtus* は
意味の上で次のように分類されるであろう。(1) 神, 天使, キリストの力,
(2) 人間の能力, (3) 奇跡, (4) 力の行為, (5) 天の万象。それぞれから 1 例づ

(9) 使用したテキストは E. Sievers (Hrsg.) *Tatian, Lateinisch und altdeutsch mit ausführlichem Glossar*, 1966² である。

つ示してみよう。

- (1) Et repondens angelus dixit ei: spiritus sanctus superveniet in te, et virtus altissimi obumbrabit tibi, ideoque et quod nascetur sanctum vocabitur filius dei (ルカ 1, 35)

Antlingota tho ther engil, quad iru: thie heilago geist quimit ubar thih, inti thes hoisten megin biscatuit thih, bithiu thaz thar giboran uuiridit heilag, thaz uuiridit gin-emnit gotes barn (3, 7)

「天使は答えて彼女に言った、『聖霊があなたの上に臨み、至高者の力があなたをおおうであろう。それ故に生れる者は聖なる者、神の子と呼ばれるであろう。』」

- (2) et uni dedit V talenta, alii autem duo, alii uero unum, unicuique recundum propriam virtutem. (マタイ 25, 15)

inti einemo gab fimf talenta, anderemo zuua, anderemo eina, einero giuuelihhemo after eiganemo megine, (149, 1)

「すなわちそれぞれの能力に広じて、ある者に五タラント、ある者には二タラント、ある者には一タラントを与えて」

- (3) et in tuo nomine virtutes multas facimus? (マタイ 7, 22)

inti in thinemo namen managiu megin tatumes? (42, 2)

「あなたの名によって多くの力あるわざを行なったではありませんか」

- (4) et diligis dominum deum tuum ox toto corde tuo et ex tota anima tua et tota mente tua et ex tota virtute tua (マルコ 12, 30)

inti minnos truhtin got thinan fon allemo thinemo herzen inti fon allero thinero selu inti fon allemo thinemo muote inti fon allemo thinemo megine. (128, 2)

「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なる神を愛せよ」

- (5) et virtutes caelorum commovebuntur (マタイ 24, 29)

inti megin himilo sint giruorit (145, 19)

「天の力は揺れ動く」

これらの *virtus* は *δύναμις* 及び *ἰσχὺς* に相応し「力」の意味を有している。B. の *chraft* に匹適する。T. には *chraft* なる語はあらわれていない。T. には「力」を意味する語はこの *virtus* 以外に *fortitudo* (1例), *maiestas* (5例), *potentia* (1例), *potestas* (2例), *vis* (1例) などがあらわれるが、これらのラテン語はドイツ語にどのように訳され、*virtus* とどのような違いがあるであろうか。それぞれ挙げてみよう。

Et ut diligatur ex toto corde et ex toto intellectu et ex tota anima et ex tota fortitudine (マルコ 12, 32)

Inti thaz her sí giminnot fon allemo herzen inti fon allemo furstantnesse inti fon allero sêlu inti fon allero strengidu (128, 4)

「心をつくし、知恵をつくし、魂をつくし、力をつくし神を愛し」

fortitudo は先にも述べたが精神の強靱性を意味し、ギリシア語原典では *ἰσχὺς* となっている。これは *strengida* (*strengi* = 現代ドイツ語 *streng* の名詞形) と訳された。この語は T. にしかあらわれない。この個所はマルコ 12, 30 と同内容であって、そこでの *virtus* はギリシア語原典ではやはり *ἰσχὺς* であった。ウルガタの訳者は同じ意味内容を表わすが、節が続いているため、同語反復を避けるために、*virtus* と *fortitudo* を用いたのであろう。従って *megin* と *strengida* との意味の差はほとんどないと言っているだろう。I. では *fortitudo* は *meghin* と訳されている。

cum sederit filius hominis in sede maiestatis suae (マタイ 19, 28)

mit thiu thiu ther mannes sun sizzit in sedale sinera mic-hilnessi (106, 5)

「人の子がその栄光の座に着く時」

maiestas は神、天使、キリストなどの栄光を表わし、ギリシア語原典では *δόξα* 「輝き、栄光」となっている。これは *mic-hilnessi* と訳され、古高

ドイツ語では T. にしかあらわれない。この語は *michl*「大きな」+ 名詞構成要素 *-nessi* から成り立っている。

Fecit potentiam in brachio suo, dispersit superbos mente cordis sui (ルカ 1, 51)

Teta maht in sinemo arme, zispreitta ubarhuhtige muote sines herzen (4, 7)

「主はみ腕をもって力をふるい、心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし」

potentia は I. では *chraft* と訳されたが、T. では *maht* と訳され、ギリシア語 *κράτος*「威力、強度、権力、支配権等」の訳である。*maht* は古高ドイツ語の中で初めて T. にあらわれるのではなく、すでに *Carmen ad Deum* (9世紀初め) にあらわれている。*cuius numen creuit lumen des maht kascof leoht*「その力は光を創造した」として *numen* が *maht* と訳されている。*numen* は「神の意志、神の力」などの意味を有し、*maht* はその訳として宗教的な地位にまで高められている。T. のこの個所においてもそのように「主のなす力」として宗教的な力に高められている。

Nam et ego homo sum sub potestate habens sub me milites (マタイ 8, 9)

Ih bin mán untar giuuelti habenti untar mír kenphon (47, 5)

「わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下にも兵卒がいます」

potestas は「公的な権力」であったが、ここでもそのような意味として使われている。ギリシア語原典では *ἐξουσία*「権利、権力、権威、支配権など」である。I. B. 同様 T. においても *potestas* は *giuuelt* と訳されている。

A diebus autem Iohannis Baptistae usque nunc regnum caelorum vim patitur (マタイ 11, 12)

Fon then tagun Iohannises thes toufares únzan nú himilo
rihhi tholet nót (64, 10)

「洗者ヨハネのころから今に至るまで、天の国は暴力で攻められ」

vis は今までの「力」をあらわす語彙と趣を異にしている vis はギリシア語の βία に相当し、「暴力的な行為を伴う力」のニュアンスが濃厚である。これは T. において not (現代ドイツ語 Not) と訳された。not は古高ドイツ語において種々な意味を有しているが、元々「圧迫された状態」を意味し、さらに「苦境, 強制, 暴力, 必要, 苦痛等」へその意味を広げていった。

(4) 「オトフリート」における *virtus*

アルザスのヴァイセンブルク修道院の僧オトフリートによって書かれた福音書⁽¹⁰⁾ (ラインフランケン方言, 9世紀後半) は翻訳作品ではないが、ウルガタが原拠となっているので、その部分を取り出して扱うことが出来る。virtus は O. において kraft, githuinge, mahti, giuualt などとなってあらわれる。1例ずつ挙げてみよう。

et dixit jesus : tetigit me aliquis ; nam ego novi virtutem de
me exiisse (ルカ 8, 46)

「しかしイエスは言った、『だれかがわはしにさわった。力がわたしから出て行ったのを感じたのだ』」

„Ih“, quad er, „infúalta, thaz étheswer mih rúarta; ih
irkánta, ih ságen thir, thia kraft hiar fáran fona mir.“ (III,
14, 36)

この *virtus* はギリシア語原典では *δύναμις* であらわれている。キリストに内在する奇跡をなすことが出来る力である。これは kraft と訳されている。T. では megin で訳されるべきものである。

(10) 使用したテキストは O. Erdmann (Hrsg.) Otrfrids Evangelienbuch 1882 である。

et videbant filium hominis venientem in nubibus caeli cum
virtute multa et majestate (マタイ 24, 30)

「そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗っ
て来るのを人々は見るとであろう」

So séhent se mit githuinge quéman thara zi thinge fon
wólkonon hérasun then selben ménnisgen sun (IV, 7, 39)

この *virtus* もギリシア語原典では *δύναμις* である。これはキリストの再臨の際のキリストの権威を表わし、*githuinge* によってあらわされている。現代ドイツ語 *Zwang* がこれに由来する *githuinge* は古高ドイツ語の O. と N. にしかあらわれない。原義は「こぶしでもって押しつける」⁽¹¹⁾ であつたらしい、そこから「圧迫、強制」の意があらわれ、「圧迫、強制」に伴なう「力」としての部分が発著となり、O. によって宗教的な意味にまで高められている。N. においては *iugum* 「軛」、*lex* 「法」、*disciplina* 「習慣」の訳語となっている。

sed accipietis virtutem supervenientis Spiritus Sancti in
vos, et eritis mihi testes in Jerusalem, et in omni Judaea et
Samaria, et usque ad ultimum terrae. (使徒行伝 1, 8)

「ただ聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受け
て、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地のはてま
で、わたしの証人となるであろう」

Thoh quément in thio mahti, giwait joh gotes krefti, thio
gibit in mit mir méist ther selbo héilogo geist (V, 17, 9)

この *virtus* もギリシア語原典では *δύναμις* となっている。聖霊によって与えられる力である。同義語を反復させることによって強調したものである。従って、*mahti*, *giwalt*, *kraft*, *githuinge* の意味の差はほとんどないといつていいであろう。

O. にはこの外 *kraft*, *giwalt* は *maiestas*, *potentia*, *potestas* の相応語と

(11) F. Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache S. 893

してあらわれる。それぞれ挙げてみよう。

cum autem venerit filius hominis in majestate sua et omnes
angeli cum eo, tunc sedebit super sedem majbstatís suae (マ
タイ 25, 31)

「人の子が栄光の中にすべての御使いたちを従えて来る時、彼
はその栄光の座につくであろう」

Químit ther selbo gótes sun fon himilriche hérasun mit
míhileru kréfti joh éngilo giscéfti (V, 20,5~6)

この majestas は T. におけると同じくキリストの栄光を指し、ギリシア
語原典もやはり *δόξα* となっており、T. では *mihhilnessi* で訳されたがこ
こでは *kraft* となっている。

Fecit potentiam in brachio suo (ルカ 1, 51)

「主はみ腕をもって力をふるい」

Dét er mit giwéliti síneru henti (I, 7, 13)

この個所は T. においてもあらわれたが、T. では *maht* で訳されていた
が、O. では *giwelt* となっている。

quia potestatem habeo crucifigere te (ヨハネ 19, 10)

「私にはあなたを十字架につける権威がある」

Joh bín ih ouh giweltig ubar éllu thinu thing in lib joh tód
hintu (IV, 23, 37)

ピラトの有する公的な権力で、ギリシア語原典では *ἐξουσία* 「力、権威、
権力」である。O. では *giweltig* であらわれる。

(5) 「ノートカー」における *virtus*

ザンクトガレンの僧ノートカーの翻訳作品⁽¹²⁾ (アレマン方言, 11世紀) において *virtus* の訳語としては *ellen* (4例), *guoti* (2例), *guottat* (2例), *here* (1例), *herti* (1例), *chraft* (-ig, 52例), *chust* (1例), *chustig* (1例), *starh* (1例), *sterchen* (1例), *triuua* (1例), *tuged* (-heit, -haft, 49例), *tugedig* (2例), *tugen* (1例), *uuolatat* (1例), *zeichenuuurcho* (1例) などがあらわれる。

N. において *tuged* と *chraft* が最も多く用いられているので, ここから検討することにしよう。古高ドイツ語 *tuged* は現代ドイツ語 *Tugend* に受け継がれ, 「徳」の意味として定着しているが, 最初からこの意味があったわけではない。この *tuged* は古いゲルマン語に属し, 古代英語 *dugop*, 古代ノルド語 *dygð* としてあらわれ, その意味は現代ドイツ語の動詞 *taugen* が示す如く, 「有用性, 卓越性, 力」などであった。今まで取り扱った文献には *tuged* はあらわれなかったが, しかし N. が最初に *tuged* を用いたのではない。すでに「ルードヴィヒの歌」(ラインフランケン方言, 9世紀後半) にあらわれている。

Gab her imo dugidi,⁽¹³⁾ Frônisc githigini,

Stuol hier in Vrankôn.

「神は王に兵力を, 気高い従者を,

(12) 使用したテキストは以下の通りである。

Nb = Notkers Übersetzung von Boethius 'De Consolatione philosophiae',
Piper, I. Bd., 1882. S. 1—363

Nc = Notker der Deutsche, Martianus Capella, De nuptiis philologiae et
Mercurii' Hrsg. v. J. C. King. 1979

Nk = Notker der Deutsche, Boethius' Bearbeitung der "Categoriae" des
Aristoteles, Hrsg. v. J. C. King. 1972

Np = Notkers Übersetzung des Psalters und der Katechetischen Den-
kmäler, Piper, 2 Bd. 1883

(13) この *dugidi* を「統率者の徳」ととる解釈もみられるが, 私はそのように解さない。

ここフランケンにおいて王冠を与えた。」

このようにここでは原初的な「力」としての意味で用いられている。この頃にはまだ *tuged* はラテン語の *virtus* の影響を被ってはいなかったであろう。この点に関して、Friedrich Maurer⁽¹⁴⁾ は、この *tuged* がすでに「ルードヴィヒの歌」に見られるところから、W. Betz⁽¹⁵⁾ の説を引き合いに出して、*tuged* がラテン語からの *Lehnübersetzung* であるとするのは誤りであるとしているが、これは Maurer の大きな誤解であると言わざるを得ない。W. Betz は *tuged* を *virtus* の *Lehnübersetzung* と言っているのではない、*Lehnprägung* と言っているのである。この W. Betz の見解は正しいと言えよう。実際、先にも述べたように *tuged* なる語は古くから存在し、ゲルマン語圏に広くゆき渡っていて、「力」などの意味を有していた、そしてラテン語文化の強い影響の下で、同じく原初的に「力」などの意味を有する *virtus* に触れることによって *virtus* のもつあらゆる意味がこの *tuged* に付与されたいわゆる「意味借用」(*Lehnbedeutung*) と言うことが出来よう。でははたして N. が最初に *virtus* の意味借用語となった *tuged* を使用したのであろうか。8—12 世紀に筆記されたと言われている *althochdeutsche Glossen* (E. Steinmeyer/E. Sievers : *Die althochdeutschen Glossen*) にはすでに *virtus-tuged* (II, 76, 64 (10, 11 世紀); 422, 10 (11 世紀); 462, 45 (同); 548, 23 (同)) が見られる。これらの筆記時期が N と同時期にあたるころからみて恐らく N. 以前にすでに *tuged* は *virtus* の訳語として定着していたのではなかろうか。しかしドイツ語の精神の語彙として *tuged* に *virtus* の訳語として確乎たる地歩を占めさせたのは N. が最初であろう。

さて、N. は *virtus* の訳語として *tuged* をどのような場合に用いたのであろうか、また、N. にあっては *chraft* をはじめとして、*virtus* の訳語は多数であるので、それらの同義語との関係は如何であろうか。

(14) Friedrich Maurer: *Tugend und Ehre*, in: *Ritterliches Tugendsystem* S. 239

(15) Maurer-Rupp: *Deutsche Wortgeschichte*, Bd. I. S. 106

virtus の訳語として最も多い tured (-heit, -haft, -ig) と chraft (chreftig) の使用の頻度は各作品において次のようになっている。

| virtus の訳語 \ Nの作品 | Nb. | Nk. | Np. |
|-------------------|----------|-----|----------|
| tured | 22 (80%) | 8 | 17 (25%) |
| turedheit | 1 (4%) | 0 | 0 (0%) |
| turedhaft | 1 (4%) | 0 | 0 (0%) |
| turedig | 2 (8%) | 0 | 0 (0%) |
| chraft | 1 (4%) | 0 | 49 (72%) |
| chreftig | 0 (0%) | 0 | 2 (3%) |

tured と chraft の使われ方は哲学的作品である Nb. と宗教的作品である Np. と丁度逆の関係にあることがわかる。Nb. において tured は多く、chraft は少ない、Np. における tured は少なく、chraft は多い。まず Nb. と Nk. において tured の用法を見て行こう。特に Nb. と Nk. における virtus の訳語としての tured は倫理的な意味での「徳(性)」を意味していて、「力」の意味はない。まず人間の精神的な態度の一つとして倫理的な悪徳 (1. vitium=achust, 2. nequitia=achust, 3. improbus=ubel, 4. malus=uuêuua, 5. nequitia=arg) との対立概念として描き出されている。

1. Num ea uis est magistratibus. ut mentibus utentium inserant uirtutes. depellant uitia? Íst tãne díu chráft án dien ámbáhten. dáz sie dien ámbahtmánnen túgede gébên. âchuste némên? (Nb. 145, 17)

「しかし官職には官吏の精神に徳性を植えつけ、悪徳を追い出す力があるでしょうか。」⁽¹⁶⁾

2. Nam imperante. florenteque nequitia. uirtus non solum

(16) このボエチウスの「哲学の慰め」の日本語訳は、世界古典文学全集26。(筑摩書房)の渡辺義雄氏の訳を使わせていただいた。

premiis caret. uerum etiam sceleratorum pedibus subiecta calcatur. et in locum facinorum supplicia luit. Íh meino dáz tien âchusten uuáltesôntên. únde frámmert tíkentên. diu túged nieht éin dánchez tárbêt. núbe íóh únder dero fertânôn fûoze getréten uuírt. (Nb. 227, 25)

「すなわち放埒が横行して栄えているというのに、徳性は報いられないばかりでなく、また犯罪者たちによって踏みつけにされ」

3. Ipsi quoque inprobi. si eis fas esset aliqua rimula aspicere relictam virtutum. Selben die úbelen chóndin sie déro túgede. día sie feruuórfen habent. íeht erlûogên dóh sámoso dúrh múot. (Nb.265, 29)

「邪悪な人々自身も、もし彼らに放棄した徳性をかいま見ることが許され」

4. Quidam. s. ut martyres. suppliciis inexpugnabiles. exemplum caeteris pretulerunt. inuictam malis esse uirtutem. Súmeliche úmbe réht kechélete. únde dés únerstrítene. tâten ánderên dés pilde. dóz uuâriu túged mít vuêuuôn úber-uuvnden neuuírt. (Nb.286, 25)

「ある人々には拷問にも屈しないで、徳性が悪に負けない手本を他の人々に示しました」

5. Institia uero et iniustitia in contrariis generibus. Illius enim uirtus. huius autem nequitia genus est. Réht únde únreht. sínt ín uuíderuuáartígen generibus. álso túged únde árg sínt. (Nk.132. 2)

「しかし正義と不正義とは反対な類のうちにある。何故なら一方の類は徳であるが、他方の類は悪徳である」

さらに tuged はこのように悪徳との対立概念のみならず、輝かしいもの (clarus=zorft, Nb. 39, 26) であり、善人にとって最高善 (summum bonum) を得る自然的機能 (Nb. 237, 24) であり、鋭意努力によって完成 (perfectio virtutum=durhnohti allero tugedo Nb. 110, 2) せられるべき

ものである。こうして N. は哲学的作品において、virtus を tuced でもって訳すことにより、古代の倫理学の ἀρετή を現出させ、ἀρετή—virtus—tuced のラインを一方において確立した。

しかし、Nb. において tuced は virtus の訳語のみばかりではない。lumen 「光」、vis 「力」の訳語として本来的な意味において用いられている。

Nunc iacet effeto lumine mentis. Táz uuíssa er ál. nû íst er uuízzelôs. nû íst er âno-uuórten des mûotes tucedede. (Nb. 15, 4)

「今あなたは精神の光も消えて横たわり」

哲学が牢獄のボエチウスの困惑と精神的弛緩を嘆き悲しむ個所であるが、この状態は絶対的尊格形を用い effeto lumine mentis とあらわされている。「光」はあらゆる認識の必然的前提であるとするのがギリシア哲学の根本理念であるとされている⁽¹⁷⁾ように、精神的な根元的活力である。これを N. は muotes tucedede と訳した。従ってこの lumen は原初的な virtus と同じ意味として N. に感じとられたのであろう。

Sed quoniam id eis. s. offitium dignitatis non adnectit propria uis. sed fallax opinio hominum. uanescunt ilico. cum ad eos uenerint. qui non estimant eas esse dignitates. Uuánda áber in dia êra nieht negíbet íro sélbero túged. núbe lúkkêr uuân dero ménniskôn. die sie êrôn uuírdige áhtônt. fône díu ingânt sie ín sâr. sô sie ze dien chóment. tie die êrâ fúre nieht nehábent. (Nb.148, 24)

「しかしそのようなことをする力はもともと栄位にはなく、人間の間違った見解によって押しつけられたものですから」

(17) Joachim Gruber: Kommentar zu Boethius de consolatione philosophiae 1978, S. 86

vis はもともと古典ラテン語において物理的・暴力的な力であったが、この個所においてはそのような意味はなく、「能力、可能性」ほどの意味であって、これは本来的な virtus の意味に近いといえよう。従って N. は tuced でもって決した。

他方、Np. において virtus の訳語としての tuced は 17 例あらわれるが、これはギリシア語の *δύναμις* に相当し、次のような意味に分類されるであろう。(1). 神の有する特性としての力 (Np. 65, 26; 235, 19; 243, 27; 468, 9) (2). 神から人間に付与された力 (Np. 55, 30; 370, 10; 575, 7) (3). 万軍の主 (神) における万軍 (Np. 176, 19; 255, 23; 265, 9; 329, 4; 329, 10; 331, 18; 349, 24; 368, 3) (4). シオンの城壁 (その堅固さの故か) (Np. 183, 25; 551, 23). それぞれ 1 例ずつ挙げてみよう。

- (1) Cantabimus et psallemus uirtutes tuas. So mârren uuir dine tugede. cantando unde psallendo (mit singendo unde mit seitspile) (Np. 65, 26)

「私たちはあなたの武勳をたたえて歌おう」

- (2) Quia gloria uirtutis eorum tu es. Vuanda du bist kuôllich iro túgede (Np. 370, 10)

「あなたは彼らの力の栄光だからです」

- (3) Domine deus uirtutum quis similis tibi? Truhten Got der tugedo. uuer ist dir gelih? (Np. 368, 3)

「主よ万軍の神よ、だれがあなたと等しかろうか」

- (4) Fiat pax in uirtute tua. Frído geskêhe dir ierusalem in dinero tugede (Np. 551, 23)

「その城壁のうちに平安があり」

Np. において、virtus の訳語としての chraft は実に数多く、まさしく *δύναμις* に相当し、virtus の有する本来的な「力」の意味の訳語として古くから伝えられているものである。しかし、意味において、tuced と部分的に重複しており、次のような意味に分類されるだろう。(1)神、天使の有する特性としての力 (Np. 47, 6; 63, 8; 65, 24; 90, 5; 174, 6; 204, 16; 223, 30; 225, 7; 247, 25; 262, 9; 262, 14; 296, 10; 316, 2; 368, 18; 431, 23; 443,

11; 495, 21; 582, 1; 593, 1; 598, 14; 606, 6) (2)神から人間に付与された力 (Np. 229, 17; 476, 12; 476, 25) (3)万軍の主(神)における万軍(天体をも含めて) (Np. 76, 12; 108, 3; 176, 19; 177, 23; 182, 22; 222, 13; 347, 4; 347, 22; 348, 20) (4)人間の肉体的精神的な力, 特にその喪失した状態において (Np. 68, 27; 98, 23; 137, 29) (5)地上の軍勢 (Np. 110, 9; 162, 16; 229, 6; 468, 3; 571, 5) (6)地上の財力 (Np. 185, 18), (7)事物の効力 (Np. 256, 18) (1)~(3)は *tuged* と完全に重複していて, 全く意味の違いはないといえよう。(4)以下の例を挙げよう。

(4) *Aruit tamquam testa uirtus mea. Min chraft ist irhartet also der tégel* (Np. 68, 27)

「わたしの力は陶器の破片のようにかわき」

(5) *Non saluatur rex per multam uirtutem. Der chúninch neuuidet kehálten in sínero míchelun chrefte* (Np. 110, 9)

「王はその軍勢の多きによって救いを得ない」

(6) *Qui confidunt in uirtute sua et in multitudine diuitiarum suarum gloriantur. So iz diê tuôt. diê sih fertrúent iro sélbero chréfte? unde sih kuôlli chont íro míchelen vihtuomes?* (Np. 185, 18)

「彼らはその資産をたのみ, そのおびただしい財力を誇る」

(7) *uuanda íro starchi ist in uirtute caritatis et sapientiae (an dero chréfte minnon unde uuísheíte)* (Np. 256, 18)

「その強さは愛と知恵との効力の許にあるから」

Np. における *virtus* の訳語としての *tuged* は神及び神にかかわる事柄に限られているようであるが, *chraft* の方は *tuged* と同様に神にかかわる「力」としての意味を有すると同時に, 世俗的な意味にまで押し広げられている。

Nb. には *virtus* の訳語としての *charaft* が1例のみあらわれる。

Ex quo etiam uirtus uocatur. quod suis uiribus nitens. non superetur aduersis. Tánân íst fíu chráft kenémmet. táz si

sih ze iro sélbûn fermág. únde dero uuíderuuáltigi neuuichet (Nb. 296, 28)

「そうしたことが徳性と言われるのも、自分の力に頼って逆境に負けないからです」

この個所の chraft は「力」の意味ではなく、「徳」の意味であることは明らかである。Nb. においてここだけに「徳」の意味で tured ではなく chraft を用いたのであろうか。ボエチウスはこの個所において運命との戦いをこう述べている。即ち、「賢人は運命との戦いに何回引き出されても苦情を言ってはならず」(vir sapiens moleste ferre non debet, quotiens in fortunae certamen adducitur) 「困難」(difficultas) が「知恵をつける素材」(conformandae sapientiae materia) である。こうしたことは virtus と呼ばれている。これは chraft と訳された。このように運命との対峙の際に力動的な chraft が必要であると N. に感じられこう訳されたのであろう。

次に Nb. における virtus の訳語としての tured と chraft 以外にもいくつかの語があらわれるが、それらの使用例は少なく、それぞれ 1～3 例ほどである。

Nb. には virtus の訳語として guoti が 3 例⁽¹⁸⁾あらわれるが、他の個所では bonitas「善」や probitas「誠実」などの訳語として用いられている。むしろ virtus のよりはこの方が直訳といえよう。

Ita fit. ut non accedat honor uirtutibus ex dignitate. sed dignitatibus ex uirtute. Sô máht tû chièsen. dáz tiu gúoti nieht kezïoret neuuirt mit temo ámbahte. núbe daz ámbaht uuirt kezïeret. mit tero gúoti (Nb. 103, 25)

「そうすると、徳性が尊ばれるのは、栄位のゆえではなく、徳性のゆえに栄位が尊ばれる、ということになります」

(18) Nb. 103, 25 (2回), Nb. 289, 3

ここでボエチウスは第2巻6章において、栄位 (dignitas) と権力 (potentia) について考える。これらが邪悪な人 (improbisimus) の手に入れば、災害 (dilurium) をもたらし、善良な人々の手に入れば、彼らにとって好まれるのは誠実 (probitas) である。従って徳 (virtus) の故に栄位が尊ばれる。故にこの virtus は probitas に置きかえられたとしても意味の違いはない。よって N. はこの virtus を probitas と感じ guoti でもって訳したのであろう。

Nb. における virtus の訳語としての chust が挙げられうる。

Nec uitia igitur nec uirtutes quicquam fuerint. sed potius mixta. atque indiscreta confusio omnium meritorum. Nón âchuste nesínt. nóh chúste nesínt. núbe gelíh. únde úngeskéiden miskelunga állero frêhto. (Nb. 321, 14)

「悪徳も美徳もどうでもよいものになり、すべての功績はむしろ混合され、見分けがつかなくなるまで混同されるでしょう」

先には âchúst (vitium) (Nb. 145, 17) との対立において taged があげられたが、ここでは âchúst との対立において chúst が用いられた。Nb. の他の箇所では chúst は ars 「振舞」 (Nb. 29, 1) や probitas (Nb. 92, 17) の訳として用いられている。chúst 自体、N. にはあまり用いられなかった語であり、O. と N. にしかあらわれない。

Nb. における virtus の訳語としての triuua が挙げられうる。

Pro premiis uerae uirtutis. subimus poenas falsi sceleris. Fúre tríuuôn dâng. ingílto ih unscúlde. únde lúkkés únliú-mendes (Nb. 33, 27)

「真実の徳性が報いられるかわりに、私は虚偽の犯罪のために罰せられるのです」

triuua (現代ドイツ語 Treue) の原義は「材木の心材のように固い」⁽¹⁹⁾

(19) F. Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache S. 789

を意味し、N. の他の個所では fides 「信頼」の訳語としてあらわれ、virtus の訳語としてはこの個所だけであり、N. が最初に用いたと思われる。この個所において uera virtus の uera は訳されていずに、triuuôn と複数形としてあらわれる。ここでボエチウスは、「自分がなして来た徳が疑いなき確固としたものである」ことを表明しているのであるが、それは N. にとって fides つまり Sicherheit として受けとられたのであろう。従って、この virtus は triuua と訳されたのであろう。

次に Np. に移って、まず virtus の訳語としての ellen を挙げよう。同一個所に 4 例かたまっている。

Ibunt a uirtute in uirtutem. Sie fárent fone éllenen. ze mêren éllenen. Sie hábeton hiêr uirtutes ad refrenationem carnis (ellin ze dero doûbungo des lichamin). teret chúmet noua uirtus (niúuuer éllin) (Np. 348, 11—14)

「彼らは力から力に進む。彼らはここに肉体を御する力を持った。かなたに新しい力が生ずる」

詩篇 (84.8) のこの個所は巡礼者がエルサレムの神殿に近づけば近づくほど勇気づけられていく精神性を示すものである。N. はさらに Sie hábeton 以下の注釈を付し、肉体を圧する精神力を説いている。ellen は古ゲルマン方言に広く行きわたっていて、ゴート語 aljan, 古代英語 ellen, 古代北歐語 eljan などにあらわれ、「力、勇気、勢心さ」などの意味をあらわした。virtus の訳語として宗教的な意味で ellen を用いたのは N. のこの個所が最初である。

Np. において virtus の訳語としての gûottât が 2 例⁽²⁰⁾挙げられうる。

Iro patientia (kedult). unde iro mansuetudo (manmindi). unde ándere íro uirtutes (guôttâtes) uuerdent fone ímo so gestâtet (Np. 115, 18)

(20) Np. 348, 27

「彼らの忍耐，彼らのやさしい心，彼らの他の善行は主によって確固とされる」

Ps. には珍しくこの *virtus* は「力」の意味ではなく *opera bona, bonum factum* の意味を表わしている。そして *gúottát* に訳され，この語は現代ドイツ語 *Guttat* に受け継がられている。

Np. における *virtus* の訳語としての *uuólatat* が挙げられうる。

NAM VIRTVS IN INFIRMITATE PERFICITVR (uuólatâte
uuerdent in únchrefte follezógin (Np. 255, 10)

「なぜならば，善なることは病んでいる時に完遂されるから」

この *virtus* の意味も先の Np. 115, 18 と全く同じ意味といえよう。*bonitas, beneficium* を意味している。これは *uuólatat* と訳された。現代ドイツ語 *Wohltat* に受け継がれている。

Np. における *virtus* の訳語として *hére* が挙げられうる。

Et percussit pharaonem et uirtutem eius in mare rubrum.
Vude irstarbta dâ pharaonem. unde sina chraft. daz chit sín
hére. (Np. 571, 5)

「主はファラオとその軍勢をい草の海に沈めた」

N. はこの *virtus* をまず *chraft* と訳したが，さらに詳しく *hére* と訳しなおした。まさしく *hére* は現代ドイツ語の *Heer* である。他の個所では *hére* は *exercitus* 「軍隊」の訳語となっていて，例えばファラオの軍勢 *exercitus pharaonis* (Np. 617, 7) は *praraonis hére* と訳されている。

Np. における *virtus* の訳語として *hérti* が挙げられうる。

Dominus uirtutem populo suo dabit. Truhten gíbet hérti
sínemo liûte (Np. 91, 19)

「主は民に力を与え」

hérti はまさしく現代ドイツ語の *Härte* であり，「強さ，硬さ，厳しさ」

を表わす語であり、他の個所では専ら *duritia* 「堅固, 厳酷」の訳語として用いられている。

Np. における *virtus* の訳語として *starh* が挙げられうる。

Fallax equus ad salutem. in habundantia autem uirtutis
suae non erit salus. Daz ros ist lúkke ze mánnes hêili. noh
des negníset er. daz iz knuôg starch ist (Np. 110, 16)

「馬は勝利に頼みとならない。その大いなる力も人を助けることとは出来ない」

starh (現代ドイツ語 *stark*) が *virtus* の訳語として用いられているのは Np. のこの個所だけで、N. の他の個所においては *vis*, *fortis*, *robustus* 「固い」の訳語となっている。また動詞 *sterchen* も *virtus* の訳語としてあらわれる。*starh*, *sterchen* は N. にあっては人間以外の事物の強さに用いられる傾向が強いように思われる。

最後に Np. における *virtus* の訳語としての *zeichenuurcho* が挙げられうる。

Benedicite domino omnes uirtutes eius ministri eius qui
facitis uoluntatem eius. Lóbtuont truhtene alle ríne uirtu-
tes (zéichinuuúrchen). sine ámbahtara. ir sínen uuillen fól-
lont. (Np. 432, 1)

「主よすべての万軍よ、そのみこころを行うしもべたちよ、主をほめよ」

この *zeichenuúrcho* は古高ドイツ語において、N のこの個所にしかあらわれない。*zeichen* 「奇跡」+ *uurcho* 「実行者」から成り立っている。即ち現代ドイツ語で表わせば *Wundertäter* であろう。ここは天使を意味しているらしい。⁽²¹⁾ *chraft*, *tuged* であらわされても意味の差はないであろう。

(21) Dahood: Psalms III. P. 30

以上で N. にあらわれる *virtus* の訳語を一応網羅的に挙げたわけであるが, *tuged* と *chraft* がその中心を占めている。N. はその他に豊かな語彙を訳語として用いることにより, コンテキストに相応しいラテン語に対応するドイツ語の可能性を探し求めたのであろう。

N. にも「力」を表わす *virtus* との同義語として *fortitudo*, *maiestas*, *potentia*, *potestas*, *vis* 等があらわれるが, ここでは詳しく触れないでおくが, その訳語は実に多様であるが, しかし *fortitudo* の訳語の中心は *starh*, *maiestas* のは *maht*, *potentia* のも *maht*, *potestas* のは *gewalt*, *maht* である。

以上イージドールからノートカーまでの *virtus* とその同義語の古高ドイツ語の訳語を調べて来たが表に表わすと次のようになる。

| ラテン語 作品 | <i>virtus</i> | <i>fortitudo</i> | <i>maiestas</i> | <i>potentia</i> | <i>potestas</i> | <i>vis</i> |
|------------|--|--|--|--|---|---|
| I. | <i>meghin</i> | <i>meghin</i> | <i>meghin</i> | <i>craft</i> | <i>chiwaldi</i> | |
| B. | <i>chraft</i> | | | | <i>kewaltida</i> | |
| T. | <i>megin</i> | <i>strengida</i> | <i>mihhilnessi</i> | <i>maht</i> | <i>giuualt</i> | <i>not</i> |
| O. | <i>kraft</i> <i>gihuinge</i> <i>mahti</i> <i>giwalt</i> | | <i>kraft</i> | <i>giwelti</i> | <i>giweltig</i> <i>walt</i> | |
| N. | <i>ellen</i> <i>guoti</i> <i>guottat</i> <i>here</i> <i>herti</i> <i>chraft</i> <i>chust</i> <i>starh</i> <i>tuged</i> <i>triuua</i> <i>etc.</i> | <i>hantstarhi</i> <i>chnehtheit</i> <i>chraft</i> <i>stah</i> <i>starchi</i> | <i>houbet</i> <i>magenchr-</i> <i>aft</i> <i>mahtheit</i> <i>mahtigi</i> | <i>festi</i> <i>geuualt</i> <i>maht</i> <i>mahtigi</i> <i>mahtig</i> <i>mahtigo</i> <i>zeichen</i> | <i>anauualto</i> <i>geuualt</i> <i>geuualtig</i> <i>chraft</i> <i>maht</i> <i>mahtigkeit</i> <i>mahtigo</i> <i>zeichen</i> | <i>maht</i> <i>chraft</i> <i>chunnen</i> <i>mugen</i> <i>not</i> <i>sin</i> <i>tuged</i> <i>starh</i> <i>etc.</i> |

I. と T. にあらわれる *meg(h)in* はラテン語 *virtus*, *fortitudo*, *maiestas* に対応し, 古いゲルマン的な語であったが, キリスト教語彙の中に取り入れられ, そこに留まったままで発達することなくやがて消滅していった。

この語は *ἀρετή* 的であると共に *δύναμις* 的でもあった。この meg(h)in と深い関係のある maht は T. において宗教的地位に高められたが、やがて権力の意味に移行し、N. においてはもはや virtus の訳語としてはあらわれない。giuualt は O. においてのみ virtus の訳語として宗教的意味を得ているが、I. から N. に至るまで potestas の訳語として一貫して世俗的権力の意味で用いられている。古くからドイツ語の中に強く根を張っているのは chraft である。I. において potentia の訳語として、B. O. N において virtus の訳語として使われ、その動的な性質上、滅することなくますます力を得、宗教的な意味を得、N. に至って最高潮に達し、*δύναμις*—virtus—chraft のラインが築かれる。また virtus の訳語として画期的な役割をはたしたのは tuced である。単なる「勇気」ほどの意味であった tuced を精神の領域へもたらしたのは N. の業績といわざるを得ない。彼にあって、特に哲学的作品において、倫理的なライン、*ἀρετή*—virtus—tuced が確立されたのである。しかし、tuced において、特に宗教的作品において *δύναμις* の部分がまだ残っていた。完全に今日の倫理的な Tugend の意味を獲得するにはハルトマンやヴォルフラムの世界を待たなければならない。

主な参考文献

- Erich Aumann: Tugend und Laster im Althochdeutschen, Aus der Werkstatt des Althochdeutschen Wörterbuchs In: PBB63, 1939
 Lane Cooper: A Concordance of Boethius, Cambridge 1928
 Joachim Gruber: Kommentar zu Boethius de consolatione philosophiae Berlin, 1978
 Theodor Frings: Grundlegung einer Geschichte der deutschen Sprache 1957³
 Richard Heinze: Zur Römischen Moral In: Vom Geist des Römertums 1972⁴
 Emil Luginbühl: Studien zu Notkers Übersetzungskunst Berlin 1970
 Friedrich Maurer: Tugend und Ehre, In: Ritterliches Tugendsystem, 1970. S. 238—252
 Maurer Fr./Rupp, H. (Hrsg.) Deutsche Wortgeschichte Bd.1. 1974
 Marga Mehring: Die Lehnprägungen in Notkers Übersetzung der, Nuptiae philologiae et Mercurii“ des Martianus Capella, (Diss) Bonn 1958
 Hans Naumann; Notkers Boethius, Untersuchungen über Quellen und Stil 1913